

## 【時評】東日本台風における栃木県内の歴史資料保全活動

Activities to preserve historical materials damage by the typhoon Hagibis in Tochigi

作間亮哉

東日本台風は、2019年10月12日から13日にかけて関東甲信地方及び東北地方に甚大な被害をもたらした。栃木県内では、佐野市葛生で416.5ミリを観測、県が管理する13河川において26か所が決壊<sup>1)</sup>、死者4名、全壊84棟、半壊5206棟、1万棟を超える住家被害が発生するなど、2015年の関東・東北豪雨以上の被害をもたらした<sup>2)</sup>。県内の指定文化財は、国指定特別史跡及び特別天然記念物日光杉並木街道附並木寄進碑などをはじめ43件の指定及び登録文化財が被災し<sup>3)</sup>、博物館および美術館などにも被害をもたらした。そのような被害が発生した状況下、県内でも歴史資料の保全活動が行われ、現在も継続して活動がなされている。

東日本台風まで栃木県内において、歴史資料の保全活動が県内の組織により行われることは数少なかった。2011年に発生した東日本大震災では、茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク（以下茨城史料ネット）により茂木町旧島崎家資料がレスキューされた事例や国土館大学、國學院大學栃木短期大学および日本女子大学などの史学ならびに考古学専攻の学生を中心とした考古遺物の復旧作業<sup>4)</sup>などの事例はあるが、どれも県外の組織を中心とした保全活動であった。東日本台風による被害発生まで栃木県内の文化財関係者は特に未指定文化財に対する保全・復旧活動への関心が低かったといえる。それは、潜在的に自然災害の発生が少ない県であるという意識があったためかもしれない。しかし、前述したように甚大な被害をもたらした東日本台風では、歴史資料に対する保全と修復が那須町・佐野市・鹿沼市の水損資料で行われ、県内の学芸員および博物館等が連携しながら対応を進めている。

筆者が勤務する那須歴史探訪館は、那須町大字芦野に所在する町直営の資料館である。芦野地区は、交代寄合旗本芦野氏の城下町および奥州道中の宿場町として繁栄した地域であるが、宿を囲むように流れる奈良川が東日本台風に伴う豪雨により越水し、床上浸水等の被害が発生した。筆者自身大学院を卒業したばかりの新米学芸員であり、引き継ぎも先輩職員同僚も当館には配置されておらず、ましてや隈研吾による資料館としてはあるまじき設計に頭を悩ませながらの状況下、仕事に慣れることに精一杯のなか発生した水害であった。筆者は大学院生時代、茨城史料ネットにて事務局員を務めていたことから、少しかりレスキュー経験はあるものの大きな不安を抱えていた。しかし、筆者は東日本大震災の被災者であり（当時は仙台の高校に通い3年生に進級する直前であり、母方の祖父の実家は地震により全壊した）、当時は資料レスキューについて何も知らず、災害ボランティアとしてアルバムや手紙などを「災害ゴミ」として捨ててしまった今では苦い体験がある。その体験から目の前で被災している資料がある可能性に対し、目をつむることはでき

ないと考えレスキューを実施した。資料館の近くに設置された災害ゴミの仮置き場に向かい、巡視の結果ふすま3点、屋号等が記載された陶器類などを回収することができた。その後、町ホームページおよびFacebookにて「被災した歴史資料等についてのお願い」<sup>5)</sup>を掲載したことで、1件のレスキューを実施した。レスキューした資料は、明治初期に那須町の初等教育を担った神田貞（1849～1893）に関係する資料群や明治後期の青年会に関する記録が含まれており、『那須町誌（前編・後編）』には収録されていない史料であった。それら水損資料を用い、11月9日に開催した無料開館デーに合わせ水損資料の乾燥作業を筆者が実際に行いながら、来館者に作業を「見える化」させるワークショップをおこなった。これには、芦野地区および那須町も被災地であることを認知してもらうこと、古文書などが被災しても修復ができること、その場合博物館や資料館に相談してほしいことを訴えかける意図があったが、来館者の中に水損資料をお持ちの方がおり乾燥方法を急遽レクチャーすることがあった。この体験は、所蔵者のなかには先祖から伝わる歴史資料が水損してもなんとかしたいという方がおり、その人たちにとって救いの手がほしいというニーズが潜在的にあるとうことを認識させた。被災経験もあり縁により茨城史料ネットの運営に携わった私が今後当館の業務ととともに進めていくことではないかと考えさせる体験であった。

佐野市における水損資料は、市内を流れる秋山川の氾濫に伴い被災した資料群であり、佐野市を含む安蘇郡域の地域資料、特に近現代における軍事関係の資料である。佐野市の水損資料レスキューの経緯については小野塚氏の論考<sup>6)</sup>に詳しいため詳細を省くが、著者が携わる経緯及び現在の経過（「分散保全」）について述べる。これまで述べてきたように、栃木県における資料レスキューへの関心は低いものであり、一時期「栃木資料ネット」が存在していたが現在は活動していない状況であった。そのようななか、茨城史料ネットより宇都宮大学高山慶子氏を中心に佐野市の被災資料を受け入れることを耳にし、有給を利用して佐野市の現場からの資料運搬及び宇都宮大学にての保全作業に参加した。大学院時代近現代史を学んでいた筆者にとって、大変興味深い資料であり、時間をかけて調査したいところではあるが、段ボール20箱分の資料が水損した状態にあり、水損資料を扱ったことがある県内の文化財関係者は限られ作業が進まない状況であった。そのため時間との勝負である水損資料ではあるが、11月に受け入れた以降2回しか作業ができず、半年ほど放置状態が進んでしまった。宇都宮大学に搬入した資料群は、主に地域資料であり貴重なものである。梅雨を迎える前に乾燥作業を進めたいと焦りを覚えた筆者は、某博物館に勤務するA氏と高山氏に乾燥作業の「分散保全」を提案した。A氏は東日本台風において独自でレスキュー活動にボランティアで参加するなど資料保全に理解のある方であり、学芸員としては大先輩にあたる。A氏に相談したところ某博物館にて乾燥作業を行えるよう交渉していただき、1/4ほどの資料を宇都宮大学から某博物館に運び出し、乾燥作業を実施することとなった。筆者も週休日を利用などしながら某博物館に足を運び、乾燥作業を行っているが、水損資料の中には『安蘇郡各市町村出身在満氏名』に関する名簿や『栃

木州市町村代表在満郷土軍慰問団報告書』など兵事に関する行政資料、地元の地銀である足利銀行が発行した貯蓄報国ポスターなど栃木県及び安蘇郡域の戦時資料が多く含まれていた。しかし、資料の概要がわかっただけでなく課題も多い。現在はまだ乾燥させやすい文書群を扱っているが、写真資料やアルバム厚手の刊本類は手つかずの状態である。写真やアルバム、絵ハガキ等は被災から半年以上を経過しているため、ファイルや保護シートに絵柄が移り取り出すことが困難な状況にある。また、写真は水で流れているものも多く散見された。資料を乾燥したのちには写真撮影・目録作成・地域への還元と順を追い作業を進めていく必要があるが、おそらく5年近くはかかるであろう。関係各位には引き続きご支援・ご協力のほどお願いしたい。

栃木県内では、すでに水損資料が修復され返却された資料も存在する。鹿沼市立清洲第一小学校所蔵資料である。清洲第一小学校は東日本台風で堤防が決壊した思川沿いにある小学校であり、床上浸水の被害が発生、校長室に収められていた開学以来の学校資料が水損した。10月18日、鹿沼市教育委員会文化課は同校に赴き段ボール箱15箱分の資料を回収し、乾燥作業および目録作成を続けた<sup>7)</sup>。2020年3月24日、同校に5か月ぶりに修復され、1893年(明治26)以降の修業生名簿、1911年(明治44)に編纂された『清洲村郷土誌』など3156点の資料が目録付きで返却されている。すべての作業を同市教育委員会文化課が担ったことは敬服に値するとともに、このような未指定の歴史資料の保全活動を行政組織である教育委員会の所管課が行ったことは県内において初めての事例であり、先進的事例といえるであろう。この保全活動をとおして清洲第一小学校はホームページにて、「この史料を次の世代にバトンタッチできるよう、大切に保管したいと思います。」<sup>8)</sup>とコメントを掲載している。ぜひ後世に繋いでいただきたい。

さて、最後に栃木県における歴史資料保全の今後の展望および課題についてふれたい。東日本台風では、県内各博物館等の施設における被災が把握されていたものの被災館に対する援助および協力が何一つできなかった。栃木県博物館協会は10月17日、「栃木県博物館協会加盟館園の開館状況一覧」<sup>9)</sup>を公開し塚田歴史伝説館(栃木市)、佐野市立吉澤記念美術館(佐野市)の被災が明らかとなったが、援助等を行うことがかなわなかった。同業者の被災を見て見ぬふりをしてしまったと感じている。いち早く災害時の横の連携を構築し災害時の相互援助関係を構築していくことが望まれる。また、県内には資料ネットのような組織は現在のところ組織するにはいたっていない。宇都宮大学及び國學院大學栃木短期大学等を中心としながら組織されることが望ましいと考えるが、今後組織されていくことであろう。少なくとも県内の学芸員及び文化財関係者と交流する中で、資料保全への意識は醸成されていると考える。意識が醸成された好機をつかみ、資料保全を行う「史料の救命士」<sup>10)</sup>である仲間を増やしていきたい。

最後になるが、仙台で東日本大震災を学生時代に経験し、大学及び大学院時代に資料保全の活動に携わった著者だからこそ資料保全の活動を続けていきたいと考えている。それが著者自身による震災時に全国各地からいただいたご支援への恩返しの方法だからだ。ま

だまだ著者の恩返しは始まったばかりである。

註

- (1) 「【台風一九号】河川氾濫、栃木県内六八カ所直撃から一週間 関東・東北豪雨超える被害か」(『下野新聞』2019年10月20日付記事)
- (2) 栃木県「第11回栃木県災害対策本部会議次第」  
〔<http://www.pref.tochigi.lg.jp/c08/kouhou/documents/2019saigaitaisakuhonbukaigi11.pdf>〕(最終閲覧日:2020年6月10日)
- (3) 栃木県「第10回栃木県災害対策本部会議次第」  
〔<http://www.pref.tochigi.lg.jp/c08/kouhou/documents/2019saigaitaisakuhonbukaigi10.pdf>〕(最終閲覧日:2020年6月10日)
- (4) 「パネル展 那珂川町の文化財被害と復旧の一年」(那珂川町馬頭郷土資料館『平成24年度企画展報告』、2013年)63頁
- (5) 那須町ホームページ「被災した歴史資料等についてのお願い」  
〔<https://www.town.nasu.lg.jp/0156/info-0000001610-1.html>〕(最終閲覧日:2020年6月10日)
- (6) 小野塚航一「歴史資料ネットワークによる台風19号対応—栃木県での史料レスキュー」(『史料ネット News Letter』第92・93合併号、2020年)7~10頁
- (7) 「【台風19号】被災の清洲第一小に助っ人 水に漬かった歴史修復 鹿沼」(『下野新聞』2019年11月8日付記事)
- (8) 鹿沼市立第一小学校学校ニュース(日誌)「文書も写真もおかえりなさい」(2020年3月26日)〔[http://kanuma-school.ed.jp/e-kiyo1/index.php?key=jowb6fsn7-22#\\_22](http://kanuma-school.ed.jp/e-kiyo1/index.php?key=jowb6fsn7-22#_22)〕(最終閲覧日:2020年6月10日)
- (9) 「栃木県博物館協会加盟館園の開館状況一覧」  
〔[http://www.muse.pref.tochigi.lg.jp/news/2019/10/17/R2\\_栃博協会員%EF%BC%9A\\_台風19号被災状況\\_修正版.pdf](http://www.muse.pref.tochigi.lg.jp/news/2019/10/17/R2_栃博協会員%EF%BC%9A_台風19号被災状況_修正版.pdf)〕(最終閲覧日:2020年6月10日)
- (10) 河野未央「風水害からの歴史資料保全」(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター『「地域歴史遺産」の可能性』岩田書院、2013年)197頁

(さくま かつや/Katsuya Sakuma)